



そよかぜ通信



●巻頭言

「たんけんスケッチ」…………… 1

帝京大学教職大学院講師 清水 保徳

提言

生活科, 残り半年, 準備は大丈夫ですか…………… 3

東京学芸大学教職大学院特任教授
元全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会会長
寺崎 千秋



研究報告①

生活科・総合的な学習の時間における キャリア教育の創造…………… 7

東京都北区立堀船小学校長
川島 瑞穂

実践報告

豊かな体験を通して ぐんぐんのびる橘っ子

大すき たちばな…………… 11

神奈川県川崎市立橘小学校教諭
山口 敦子

研究報告②

子どもの＜自立への基礎＞を養う 生活科教育の在り方…………… 15

一好むと好まざるとにかかわらず生活科と
かわつてきた「はちきん」に見えてきたもの一

高知大学教育学部 非常勤講師
澤村 理恵





「たんけんスケッチ」

帝京大学教職大学院講師
清水 保徳

■ 子どもたちの願い

1年生の秋。実りの秋よろしく、学校にも慣れ、地域にも慣れ親しんだ子どもたちの夢はふくらんでいく。

「私は、植物園に行って絵を描きたいです。絵が上手になれるからです。」

「私は、みんなとお弁当を食べるのが楽しみ。だってきれいな葉っぱや花を眺めながら食べるとおいしそうでしょ。」

「ぼくは、木の実をひろってコマを作りたいです。みんなとコマの競争をしたいです。」

「植物園を探検したいです。世界中をぐるり、地球を七回半まわりたいです！」

ちょっとふくらみすぎの夢も一緒に詰め込み、植物園に行く計画を立てた。

その名も「たんけんスケッチ」！

■ 個か集団か(PM理論)

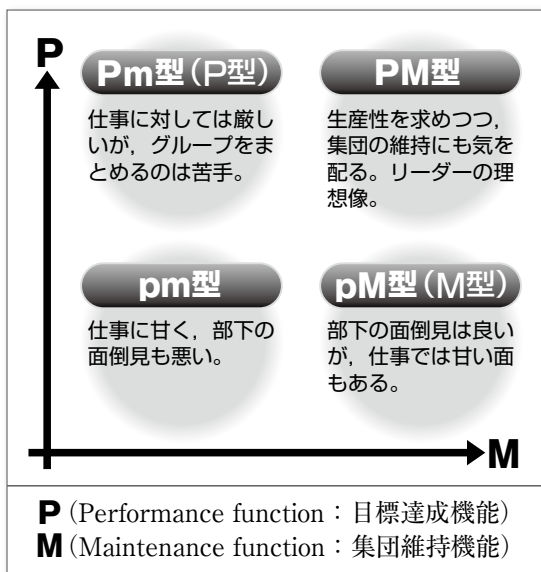
子どもたちの多様なニーズに応えるため、目的別でグループ編成を行った。

- お花のスケッチをするチーム
- 大きな木のスケッチをするチーム
- 植物園をたんけんしてスケッチするチーム
- 虫や動物を見つけてスケッチするチーム
- 木の実でコマを作るチーム

などが結成されていく中、Kくんだけは、「ぼくは、池に来る鳥の絵を描きたい。」の一点張り。池の縁にじっと座って鳥が来るのを待つことが他の子たちには退屈に思えたのか、なかなか賛同者が集まらない。Kくんは、普段は仲間たちと校庭で元気に遊ぶ活発な子だったが、このときだけは「池の鳥」に固執した。

を待つことが他の子たちには退屈に思えたのか、なかなか賛同者が集まらない。Kくんは、普段は仲間たちと校庭で元気に遊ぶ活発な子だったが、このときだけは「池の鳥」に固執した。

せっかくクラスみんなで行くのに、たった一人で「たんけんスケッチ」も寂しいのではないかと思う反面、友達の意見に引きずられて簡単に自分の意見を引っ込めてしまう子も少なからずいる中、自分の目的意識をしっかりとっているKくんの姿を頼もしいとも思った。



人は集団の中でどのようなふるまいをするのか、その類型化を試みたのが三隅^{みすみ}二不^{じゅう}二(1924～2002年。福岡県出身の心理学者)が唱えたこの「PM理論」であるが、これはもちろん子どもの世界にもあてはまる。Kくんのように自分のやり

たいことにじっくりと取り組み「個(目標)」を大事にする子。自分のやりたいことよりも仲間との人間関係「集団」を優先する子。言うまでもなく、この両方のバランスがとれた「PM型」の子を我々は育てようとしているのだが、全ての子が「PM型」であったら、学級集団として果たして機能するのかという疑問も残らないでもない。

ともあれ、ここはKくんの考えを尊重し、スケッチの時間は希望通り、お弁当はみんなと一緒に食べることにした。

図 子どもだから見える世界

前日までぐずついていた空も、この日だけは気持ちよい秋晴れとなった。大人の心配をよそに、無事「たんけんスケッチ」も終わった。その日、Kくんは、次のような日記を書いた。「今日はたのしいたんけんスケッチです。ほくは、とりで、なかなかみつからないとおもったら、カワセミがいて、ほくは、やった！とおもった。つぎはカモがいて、とりしかいませんでした。けどほくは、たんけんするといっただので、そのとおりでよかった。」

カワセミの姿を切り取ったKくんのスケッチを見ると、その流れるような線に、いかにも鳥が好きなんだなと感心させられる。仲間と群れ遊ぶのではなく、ただ一羽だけで獲物を狙うその姿に、自分をダブらせていたのかもしれない。



Kくんが描いたカワセミ

他にも、こんな日記に目が留まった。

「今日、たんけんスケッチをやりました。ほくがかいたのは、ニュートンのリンゴとメンデルのブドウと、ミヤマキリシマをかきました。おべんとうをたべたあと、ブルーベリーの木の中に入りました。タイムマシンみたいです。またいきたいです。」

「しょくぶつ園は広がったです。バッタがいっぱいいました。図かんでしらべると、ショウリョウバッタやオンブバッタやトノサマバッタがとびはねていました。カタツムリもいました。私がむかしかっていたカタツムリと同じもようでした。メタセコイヤの林にきょうりゅうのひっかききずがついていました。私はビックリしました。」

大人はついつい自分の物差しで世の中を見てしまう。それだけでなく、その枠の中に子どもを当てはめ、そこからはみ出る子を「特別な子」として決めつけてしまう。子どもの目をもう一度取り戻したいものである。

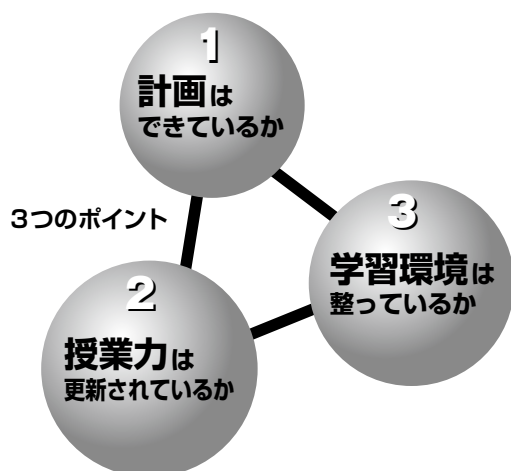
生活科、残り半年、準備は大丈夫ですか

東京学芸大学教職大学院特任教授

元全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会会長

寺崎 千秋

新教育課程の完全実施までに半年をきった。完全実施とは、新学習指導要領に基づく教育課程の編成とそれを具体化した単元等の指導計画の作成を仕上げるのと同時に、これらの計画にそって授業を確実に実施することにより、生活科の目標を一人ひとりの子どもに具現することである。以下は、生活科において残りの半年で各学校・教師が新教育課程の完全実施に向けて準備することの要点である。



■ 生活科の教育課程・指導計画はできているか

新学習指導要領の生活科の目標や内容を実現するためには、この移行期間に新教育課程の編成とそれを具現する単元等の指導計画の作成が必要であり、その際に特に以下の点が位置付けられ準備が整っているかを確認しよう。

① 新たな目標・内容の位置付けと内容の扱いの工夫

新学習指導要領の生活科では教科目標は継続された。ということは、一層重視されているということである。また、学年目標では、「地域のよさに気付く」「安全」「自然のすばらしさに気付く」「身近な

人々、社会、自然とのかかわりを深める」「考えること」などが新たな視点となっている。内容では、「安全を守っている人々」「地域で生活したり働いたりしている人々」「愛着」「自然の不思議さに気付く」「自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動、かかわる楽しさ、進んで交流」「自分の成長を振り返り」などが新たに加えられている。さらに、内容の取り扱いでは「具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考えさせるために、見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動の工夫」などが新たに示されている。これらの趣旨や意味を把握し、指導計画に具体的に位置付けてあるか。

② 子どもの思い・願いや課題の実現・解決を可能にする指導過程

生活科の指導計画は、教師が設定した目標や内容を「与えて・させる」ものではない。学習の対象である「身近な人々、社会及び自然」などに会い、具体的な活動や体験を通して、子どもが思い・願いや課題をもち、その実現や解決ができるようにするものであることが望ましい。したがって、教師は子どもの思い・願いや課題がどのようなものか「聞いて・助けて・見守る」といったかかわり方をすることが大切である。「与えて・させる」指導過程ではなく「聞いて・助けて・見守る」指導過程となっているか。

③ 2年間の系統性や発展性、継続性やストーリー性のある計画

生活科の学年の目標・内容は2学年まとめて示されている。したがって、第1学年及び第2学年のそれぞれにどのように内容を配置するかは学校が決めることになっている。単に教科書の扱いに頼るといった専門性を疑われるような取り組みではなく、自校の実態や地域の特色を生かした、2年間の内容



の系統性や発展性，継続性やストーリー性のある指導計画として工夫されているか。また，そのプロセスで子どもが意欲的に学び，子どもの育ちがイメージできるような指導計画となっているか。

④学校や地域の特色の活用

よく言われるように，生活科の学習の場は教室内だけではない。学校内のあらゆる場所や設備など，地域の多彩な場所や環境などが学習の場となる。またそれぞれの場や環境にかかわって多くの人々との出会いやかかわりも学習対象や機会となる。これらの学校や地域の実態や特色を把握し，それらを学習内容や学習活動と関連させて十分に活用できるように指導計画に位置付けているか。

⑤総合的・関連的な指導の位置付け

生活科は低学年の子どもの「自立への基礎を養う」ことを目標とし，低学年の学習や生活づくりの核となる教科である。学校生活の多彩な内容や場が学習内容や対象となる。学習や生活が楽しく充実したものとなるためには，生活科の学習を国語や図画工作，

音楽，道德の時間，学級活動などに関連させたり総合的な扱いを工夫したりなど，学習や生活づくりを子どもの思い・願いや課題の実現・解決に向けたものとなるようにすることが必要である。これらを意図して指導計画が総合的・関連的に作成されているか。

⑥評価計画の位置付け

子ども一人ひとりや子どもたちの学習を充実させるためには，学習の過程や結果において子どものよさや進歩の状況を積極的に評価

するとともに，学習意欲の向上に生かすことが大切である。そのためには，指導計画に位置付けた学習内容や学習活動に即した評価計画を位置付けることが必要である。評価の観点，評価基準（規準），評価方法や記録，評価後の指導の手だてなどが指導計画に位置付けられているか。

以上，生活科の指導計画は低学年教育の核となるものである。学校組織を挙げて取り組み，低学年の子どもの学習や生活を充実させ，自立への基礎を養うことを確実にするものとなるよう工夫することが期待されている。

四 生活科の授業力は更新されているか

生活科の指導計画を充実しただけでは新教育課程は完全実施できない。どんなによい指導計画でも，それに即した授業が実践できなくては絵に描いた餅にすぎない。子どもの生活科の学習が子どもの思い・願いや課題の実現・解決に向けて充実したものとなるためには，教師の授業力の更新が必要である。特に，生活科に固有の授業力として，以下の視点から授業力を更新することが必要である。

①具体的な活動や体験の指導

生活科の教科の特性として、学習の目標・内容・方法において「具体的な活動や体験を通す」ことが上げられる。他教科にありがちな教師の説明・解説中心の一斉授業は生活科には馴染まない。子どもが学習の対象である身近な人々、社会及び自然と出会い、触れ合うようにし、その活動から対象に対する思い・願いや課題をもち、その実現・解決に向けて学習活動を進めていけるようにする指導である。教師はあらかじめ綿密な指導計画を作成しているが、その通りに子どもになぞらせるのではなく、子ども自身が学習を進めていけるように指導を工夫することが大切である。このような指導ができるように授業力が更新されているか。

②かかわりを豊かにする指導

かつて生活科は「かかわり科か」と揶揄されたくらい、身近な人々、社会及び自然とのかかわりを大切にしている。かかわることが目的の一つであるが、かかわることを通して「自分自身や自分の生活について考えさせる」など、教科目標や学年目標、各内容の実現に迫ることがねらいである。したがって、「身近な人々、社会及び自然」とのかかわりの機会

を豊富にもつとともに、かかわりを深められるように指導することが必要である。

どのような対象を選択し、どのような機会を設定し、どのようにかかわるように計画するか、その際の手だてや配慮すべきことを考え指導することができるような授業力が更新されているか。

③気付きの質を高める指導

生活科は活動や体験を重視するが、活動や体験のやりっ放しでは指導したことになる。活動や体験から身近な人々、社会及び自然に関しての気付きが広がり深まることをねらっている。そのための指導の工夫としては、見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動の指導、振り返り表現する活動の指導、伝え合い交流する活動の指導、試行錯誤や繰り返す活動の指導、子どもの多様性を生かす指導などが上げられている。また、科学的な見方や考え方の基礎を養う観点から、自然の不思議さやおもしろさを実感する指導が重視されている。さらには、働きかける対象についての気付きとともに、自分自身に気付くことができるようにする指導が求められている。

これらの指導を確実にに行える授業力が更新されているか。

④「きいて・たすけて・見守る」指導

生活科の指導は「与えて・させる」のではない。「きいて」とは、子どもの思い・願いや課題をその発想から着想・構想へ具体化し、実現や解決にいたる過程において「きく」ことを大切にすること。その上で、思い・願いや課題が実現・解決するよう子どもの活動や取り組みを「助け・見守る」ことである。「見守る」とは評価の観点や基準をもとに活動を評価し、そ



生活科，残り半年，準備は大丈夫ですか

の後の支援・指導をどう講じるかを判断することである。こうした教師の働きかけにより子どもの学習活動が充実するように授業力が更新されているか。

以上，生活科の新教育課程及び指導計画を実現するためには，①～④の指導が確実に行える授業力を更新することが必要である。生活科が始まって早20年である。全ての教師が子どもの思い・願いや課題の実現・解決を確かに指導できる授業力を身につけることが求められている。

㊦ 学習環境等は整備されているか

教育課程の改訂期は生活科の学習環境や条件整備のよい機会である。特に以下の点について新教育課程・指導計画の視点からこれらを見直し，環境整備等を確認する。

①生活科室や生活科の作品掲示・展示場所等の整備

生活科室が物置になっていないか。学習活動の充実を可能とする場，学習のための資料や材料が豊富に用意され，子どもの活動へのイメージがふくらむ場，休み時間などにも訪れて活動を楽しむ場，生活科の作品等を楽しんだり学び合ったりする場となっているか。

②飼育・栽培活動の環境整備

飼育・栽培活動には長期的な計画や整備が必要である。指導計画にそって活動が円滑に行われるよう学年・学級の活動場所が確保されているか。活動に必要な予算が確保されているか。学校全体の飼育・栽培活動の一環として生活科の活動が位置付けられているか。



③図書や学習資料の充実

飼育・栽培活動では子どもの興味・関心が高まり，詳しい情報等を求める例が多い。これらの課題要求に答えられる図書や学習資料を図書室や学習センターなどに揃えてあるか。予算が必要なことであり長期的な計画で充実するようになっているか。

④生活科マップ・生活科暦の改訂

学校の周囲や地域の環境は変化・変容する。これらの状況を鑑みて生活科マップや生活科暦を見直し修正して，新指導計画に位置付けて活用できるようにしてあるか。

⑤家庭・地域との協力・連携体制を見直し充実しているか

家庭や地域での学習活動が充実するために，保護者や地域の関係者に新指導計画やその実施に当たった協力などについて説明をし協力が得られるようにしてあるか。

以上，生活科の指導の充実のためには，子どもたちの学習活動が豊かに展開できるようにする環境の整備と活用が重要である。学校・家庭・地域が協力して，子どもの学習環境を整備するよう学校がリードすることが必要である。

生活科・総合的な学習の時間における

東京都北区立堀船小学校長

川島 瑞穂

Ⅰ はじめに

フリーターやいわゆる「ニート」が社会問題となり、また人とかかわり方がわからない自己中心的な若者の増加が問題となっている今、学校教育においては自他を大切に、夢や希望をもって主体的に未来を切り拓く資質や能力を小学生のうちから育成することが重要である。そこで本校では、経営方針に『心の絆づくり』を掲げ、全教育活動を通して人とかかわりを大切にした教育活動を推進してきた。この推進によって、子どもたち一人ひとりが、人とかかわる中で、自分のよさに気づき、自分を好きになり自信をもって、それぞれにふさわしいキャリア（生涯にわたって遂行する立場や役割）を形成することができると考え、東京都教育委員会人権教育推進校として『人権教育を基盤としたキャリア教育の創造』のテーマで研究を実践している。

キャリア教育で目指す4つの能力は以下の通りである。

「人間関係形成能力」

○自分の個性を発揮しながらさまざまな人々とコミュニケーションを図り、協力・協働して物事に取り組み

「情報活用能力」

○学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす力

「将来設計能力」

○夢や希望をもって自分の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する力

「意思決定能力」

○自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み、克服する力



地域の名人から昔遊びを伝授してもらう

キャリア教育は生き方教育である。前掲のキャリア教育で目指す能力は、自立の基礎を育成する生活科や探究活動を通して課題解決能力の育成が求められる総合的な学習の時間の目標と合致する部分が多い。以下、4つの能力にかかわる実践を紹介する。

Ⅱ 自分や他者のよさを知り、仲よく活動する（人間関係形成能力）

キャリア教育で目指す大きなねらいの一つが『人間関係形成能力』の育成である。本校では、さまざまな方とかかわりを通して自分や相手を好きになり、適切なスキルを身に付けることのできるコミュニケーション能力の育成を図っている。

第2学年生活科『名人といっしょ』では、毎年15名の地域のお年寄りしょうがいを招聘し、こま、けん玉、おはじき、あやとり、お手玉を教えていただいている。子どもたちは教え上手、褒め上手の地域の名人とのふれあいで、適切なかかわり方を学び、自分に自信

キャリア教育の創造



をもって主体的に活動していく。また、教えていただいた技を、1年生に教えてあげたいという願いをもち活動を広げていく。授業後は、地域でお会いしたときなど挨拶を交わせるようになり、地域からも好評である。子どもたちはこの実践を通して、地域の方、友達同士、1年生とかかわり、人間関係形成能力を磨いていく。

総合的な学習の時間では、障がいのある方との交流を盛んに行っている。第3学年は、『共に生きるⅠ』で聴覚障がいのある方と、第4学年は『共に生きるⅡ』で視覚障がいのある方と、交流している。第5学年は、そのまとめとして『共に生きるⅢ』で肢体不自由の方たちと交流し、

3年間のまとめとしてバリアフリー調べをして、共生のために自分でできること考え、探究しながらまとめていく。その思いをさまざまな方法を用いて保護者や友達に発信する。障がいのある方とかかわりで子どもたちは、『共生』について考え『人間関係形成能力』を身に付けるとともに、前向きに生きる姿勢や生き方を学び、夢や目標をもってがんばることの大切さを自覚することにもつなげ



視覚障がい者の方との交流



地域の人にインタビュー

ている。授業後、町で障がいのある方にお会いしたとき、自然にかかわる子どもの姿に感心したとの保護者からの感想も寄せられている。

図 調べたことを発表する・さまざまな職業を知る（情報活用能力）

新学習指導要領では、表現力・伝え合う力が求められている。生活科や総合的な学習の時間の中で、発見したことや調べたことを「まとめ、発表する」活動は不可欠である。そのことがキャリア教育の『情報活用能力』につながっていく。

第2学年の『町のひみつを伝えよう』では、グループで地域に出かけ、商店街の人、神主さん、図書館の人などたくさんの人とインタビューを通してかわり、町のひみつを見つけた。子どもたちはそれらを集め、比較・関連付けながらまとめていった。その際の教師の価値付けやまとめ方のスキルの助言などが有効にはたらき、子どもたちは、生き生きと伝える方法を自分たちで考えて発表することができた。キャリア教育の視点で大切なことは、「人とか

かわらせる」ことである。建物やもの、自然の発見だけにとどまらず、そこで働く人に目を向けさせる。そのことにより、子どもたちは地域の人のさまざまな職業や生き方に気付いていく。

第6学年『僕の夢・私の夢・探検隊』では、子どもたちは、自分の興味がある職業の体験や調べ活動、職業人にお話を聞く活動をする中で自分の将来について考え、夢や目標をもって前向きにがんばる心をはぐくんでいく。夏季休業中に、保護者の協力を求めながら家業を手伝わせてもらったり、なりたい仕事を見学させてもらったりしてワークシートにまとめてくるという課題を与えた。9月になって一人ひとりが成果を発表し、次に「みんなで仕事を体験しよう」という活動につなげていった。併設の幼稚園や保育園、近所の工場や企業、図書館、都電の車庫等に依頼しグループで半日仕事体験をさせていただいた。その中で、仕事の大変さや働く人の思いを感じ、自分の生き方を振り返る。その体験をまとめ、子ども同士で情報交換し、さらに自分になりたい職業の探究を続ける。実際に会社経営者、スポーツ選手、医師、消防官をゲストティチャーとして招聘し、働くことの喜びや苦勞、職業に就くための方法を聞く活動を設定した。

この単元の学習により子どもたちは、職業の理解を深め、さまざまな情報を参考にしながら自分の将来の夢を決め、『情報活用能力』を高めることができた。この単元のまとめとして、中学進学を控えた時期に、「僕の夢・私の夢宣言」の時間を設定した。友達や教師、保護者に自分の将来の夢を宣言することで、より前向きにがんばろうという意欲を高めることになった。

4 自分の役割の必要性がわかる (将来設計能力)

「毎日、子どもが新聞取りを続けています。これもあの勉強のおかげです。」「積極的にお手伝いをし



次に挑戦する仕事を考え、「やりますカード」に書く

てくれます。私が風邪をひいたとき僕がやるよ、と家事を代わろうとしてくれました。頼りになる息子にみえました」。第1学年生活科『できることを広げよ

う』の単元後の保護者からのメッセージである。夏休みの絵日記をきっかけに、家庭の仕事調べを始めた。その結果、たくさんの仕事があることや母親の仕事量が多いことなどに驚き、自分もやりたい、挑戦したいとの意欲を示してきていた。家庭と連携を密にとり、保護者と担任から「やりますカード」に称賛の言葉を書いてもらうことにより仕事への意欲は高まってきた。また、自分の役割を自覚し、自己有用感をもつこともできた。数週間仕事を続け、また新たに自分にできそうなことを選択し、実行する中で、効率的な仕事をするための手順を覚え上達する喜びを感じて計画実行能力も身に付けることができた。

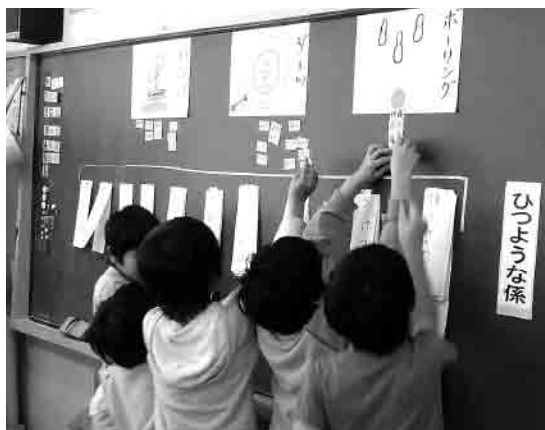
第4学年総合的な学習の時間『二分の一成人式を創ろう』の単元では、出席した祖母が孫の成長に涙を浮かべる感動的な式を子どもたちの手で企画・運営することができた。教師の20歳の頃や現在20歳の卒業生の話聞くことから、自分の20歳を想像し、作文を書く。生まれてから今までどんなことがあったのか、家族へのインタビューなどを交えて探究し振り返る。それを基に、自分のよいところ、友達のよいところ探しをして自分の成長や人とのかわりの大切さに気付いていく。さらに、その感謝の気持ちを表すためにどうしたらよいか考え、『二分の一成人式』を共同しながら企画・運営する。「成長をわかってもらうにはどうしたらよいだろう。」「式だからお母さんだけでなく校長先生やお客様も呼びたいね。」など、意見を出し合い、プログラム

生活科・総合的な学習の時間におけるキャリア教育の創造

を考え、招待状、装飾等を作成していった。土曜学校公開日に開催したことから多くの保護者を集め、賛同する地域の方の参加もあった。子どもたちはその中で立派に将来の夢を発表し、成就感・満足感を高めることができたと考えられる。

Ⅲ 自分のやりたいことを決める (意思決定能力)

低学年では、まだ、自分の好きなもの、好きな遊びが決められない子どもも少なくない。自分の好きなもの、大切なものがわかることは、活動の意欲、探究の意欲に直接関連する。生活科では、子どもたちが自分で好きな遊びを選択し決定するという場面がたくさんある。その場면을数多く設定することが『意思決定能力』の育成には必須である。高学年になっても意欲的に学習させるためには、やりたい活動に対して自分の役割をもたせ、それをやり遂げることの喜びを味わわせることが必要になる。第3学年総合的な学習の時間『船っ子まつりをしよう』では、子どもたちの意思決定の場面や共同で追究する活動も数多くみられた。学校全体で開催する「船っ子まつり」にどのようにかわるか話し合い、その後、総合的な学習の時間をつかい、「人に喜んでもらえるおまつり」を目指して企画・運営をしていった。



好きな係を選択

何をするか話し合い、自分の係を決定し、またその係の内容を決定するなど、「決定」という意思決定の場면을教師が意図的に意識させて実践した。

「自分で決めたことは最後までやり通す」この経験を繰り返しさせ、子どもが成就感、満足感をもつことができれば、自分の将来の夢をもち実現を目指して努力しようとする態度が育成できると考えられる。

Ⅳ おわりに

キャリア教育は、とりたてて新しい内容を取り上げる教育ではない。教師は、今までの実践を振り返り、授業改善を行いながら目ざす能力を意識して意図的に指導することが大切である。

この2年間継続して、質問紙法によるアンケートを取り、子どもの変容を探ってきた。その結果、教師の意図的な指導により子どもの伸びは違ってくるということがわかった。「課題について自分からすすんで調べることができるか」という問いについては、1年次70%であったが2年次は85%という結果が出た。また、「調べてわかったことをすすんで発表することができるか」という問いも同様に55%から78%の増加をみた。探究活動や発表の場・機会を数多く取り入れて自信をもたせた成果だと考えられる。また、「自分の夢ややりたいことに向けてがんばっているか」という問いに自己評価が厳しくなる高学年で83%の子どもたちが肯定的な回答をしたことでも成果が伺える。

このような実践を通して、さまざまな人とのかわりを設定し、人の思いや願い・努力・喜びに気付かせること、子ども一人ひとりの役割を明確にし、その役割を果たすことで成就感・満足感をもたせることの大切さがわかった。また、目標や課題を常に意識させる学習過程を1単位時間及び単元全体でも工夫すること、意思決定の場면을数多く取り入れることにより、夢をもってがんばる子どもの育成につながると確信する。

豊かな体験を通して ぐんぐんのびる橘っ子 大すき たちばな

神奈川県川崎市立橘小学校教諭
山口 敦子

Ⅰ はじめに

橘小学校の学区は、学校をはさんで歴史のある寺社や畑、JR 南武線の武蔵新城駅に向う住宅の多い地域、自然あふれる公園や野原のある地域にわかれている。学校の裏には、春日台公園やふれあいの森があり、自然とふれあえる恵まれた環境がある。学区が広いので、低学年の子どもたちの活動範囲はそれほど広くなく、自分の家の周りに限られてしまっているのが現状である。しかし、2年生も後期になると、少しずつ活動範囲も広がり、遠い友達の家に行ったり、買い物の手伝いをしたりする子が増えてきていることが、子どもたちの会話や日記からわかってきた。同時に橘の地域のいろいろな施設や建物、店に目がいくようになり、興味もふくらんでいた。

そこで、本単元では、「人」に目を向けさせ、地域の人とのかかわりを重視した学習展開を考えた。質問したり、教えてもらったりすることを通して、自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や、さまざまな場所とかかわっていることがわかる。そして、それらに親しみや愛着をもち、ルールやマナーを守って安全に活動する大切さや、町や町の人々とかかわることの楽しさに気付くことが出来ると思った。

また、1年生に発表することを投げかけ、聞き手を意識しながら発表会が開けるように支援していった。自分より小さい1年生に向けて発表するためには、発表内容を吟味し、発表方法を工夫していく必要がある。そのためにグループごとに見せ合ってアドバイスし合うリハーサルの時間を設定した。子どもたちは今まで気が付かなかったことに気付き、気付いたことを伝え合い交流することができる。そのことは集団としての学習を高めるだけでなく、一人ひとりの気付きの質を高めていくものと考えた。

以上のことを考えて本単元では、

- ①地域の人や橘の町のよさに気付く。
- ②調べてわかったことを、「聞き手」を意識しながら伝え学びあう。

この2点を意識して取り組んでいった。

Ⅱ 活動の実際

●もっとよく知りたいな

6月に行った町探検では、「お気に入りの場所」を紹介し合うことから探検場所が決まった。自然豊かな橘の特徴から、どちらかというと自然や公園を選ぶ児童が多かった。今回の活動では、この町に住む人や働いている人にも目を向かせたいというねらいがある。そこで、「町の写真クイズ」を最初に行った。



▲町の写真クイズ



問題



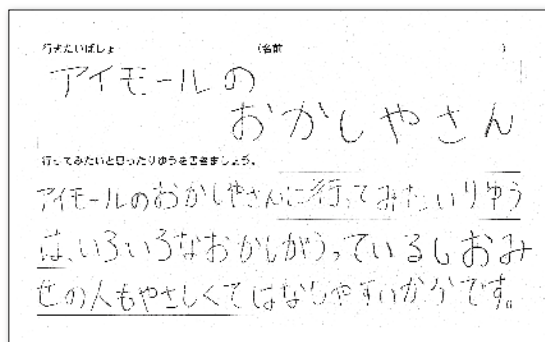
答え

橋の町で働く人々に興味をもてるように、場所だけを写した写真ではなく、そこで働く人が写っているものを用意し、人への意識がもてるようにしていた。また子どもたちの「探検に行きたい場所」に対する思いや願いを生かしていくために、自分たちの思いを発表し、自分たちでグループを作っていく活動を設定した。

●探検に行きたい場所を決めよう

ぼくは、和菓子屋さんに行こうと思います。床屋に行った帰りにいつも買います。とてもおいしいです。ぼくと一緒に行きませんか。

私は市民プラザに行こうと思います。プールと体操を習っている所だし、いっぱい知っている人がいます。コーチのことを伝えたいです。私と行きませんか。



▲行きたい場所カード

子どもたちは自分の行きたい場所を友達に伝え、自分たちでグループを作っていった。たった一人だったが、どうしてもその場所に行きたいと言ったAさん。また、「人数が少ない」とみんなの前でアピールし友達を誘っていたBさん。クラスでは一人でも、見学のときには学年全体でそれぞれの場所ごとに見学に行くので、問題はなかった。見学の計画、まとめ、発表のときは一人になったが、本人はやる

気いっぱいがんばっていた。子どもたちの思いや願いを生かしていくため、可能な限り希望に添えるようにしていった。

今まで、自分たちだけでグループを決めたことがなかったが、自分たちで決められたことに自信をもったようだった。

●町となかよくなろう

繰り返しかかわるため、2回の町探検を設定した。

1 回目の見学

そこで働いている人とかわり（インタビューなど）、その場所について知る。

2 回目の見学

働いている人を意識した質問を考え、そのことによって、働いている人のことがよりくわしくわかるようになることをねらい、見学の計画を立てる。

＊「1年生に橋の町のことを紹介してもっと橋の町を好きになってもらおう」というめあてをもち、橋の町を好きになってもらうためには、紹介した場所のことはもちろん、そこで働いている人の素晴らしさを伝えたいという気持ちをもたせたいと考えたからである。

1 回目の見学 質問

「おかしのお屋」

- ・「〇〇屋」で一番人気の商品はなんですか？
- ・なんのおかしがおすすめですか？
- ・店員さんは何のおかしが好きですか？
- ・1日に何人ぐらい来ますか？
- ・一番おいしいおかしはなんですか？

副店長さんは優しく質問に答えてくれたんだね。もっと副店長さんのことが知りたいね。

まず、その場所のことを知りたいという思いが強くなり「そこで働く人」にはなかなか目が向かなかった。そこで、1回目の見学が終わった後、上記のようなコメントを書くことで子どもたちはそこで働く副店

長さんに目が向くようになっていった。このグループは1回目の見学の際に、副店長（Kさん）の名前を教えてもらったことでより親しみをもつきっかけになっていった。

2回目の見学

- ・ Kさんはなんでやさしいんですか？
- ・ いつから「〇〇屋」にいるんですか？
- ・ お店は朝の何時からやっていて、夜の何時までやっているんですか？
- ・ お仕事の中で大変なことはありますか？
- ・ この仕事は夢だったんですか？



子どもたちの質問はKさんのことをもっと知りたいという質問が多くなり、Kさんとよりかかわりをもつようになっていった。

他のグループでも1回目はその場所について聞きたいことをインタビューしていたが、2回目になると、そこで働く人の名前を聞き、働いていて楽しいこと、うれしいこと、などその人にかかわる質問をしていた。

今回2回の探検を設定し、人について目を向けさせ、視点をもって臨んだことで、より深いかかわりができた。

また、自分たちが調べていろいろわかってきた橋の町のことを、1年生に伝えたいという思いをもつことで、橋の町を大すきになってもらうためにはどんなことを伝えるとよいのかを考え、2回目の町探検に臨むことができた。

●伝えたいね、橋の町

1年生に発表するにあたって、各グループごとに、キャッチフレーズがあるとよいという提案があり、伝えたいことを短い言葉でつなぎ、キャッチフレーズ作りを行った。

「市民プラザ」

- ・ みんなが楽しめて コーチがやさしい しみんプラザ
- ・ ひみつがいっぱい ニコニコ しみんプラザ

「おかしな〇〇屋」

- ・ ニコニコ〇〇屋 にこにこKさん

「おもちゃさん」

- ・ ひみつの〇×屋 だいすき〇×屋

「ガラス工場」

- ・ ガラスびかびかガラス工場

「とうふ屋さん」

- ・ あじよし しゅるいよし とうふの〇〇

「コンビニエンスストア」

- ・ なんでもそろろ コンビニA

「ドラッグストアB」

- ・ やすい1番 しょうひんそろって
店長やさしいドラッグB最高だよ

「ちとせ交番」

- ・ ニコニコちとせ交番

子どもたちは上記のようなキャッチフレーズを考え、1年生に発表するために自分たちが今までやってきたいろいろな方法を使い準備をしていった。





アドバイスカード▶

わかりやす
くなっているか、
伝えたいことが
きちんと入っ
ているかなど
グループごとに聞き合い、
アドバイスし合うことで、自分たちでは気付かない
ことに気付いていった。どのグループも、よりよい
ものにしようと時間を見つけて練習し、準備する様
子が見られた。

発表は準備をしっかりとっていたこともあり、どの
子も自信をもってすることができた。

一人で発表したAさんも写真をうまく使い、自信
いっぱい生き生きと発表することができた。

㊦ 終わりに

本単元で「人」に視点を当て進めたことは、子ど
もたちの見学がぶれることなく進められてとてもよ
かった。「人」に視点を当てながら進めることはす
ぐに物や事に意識がいつてしまう子どもたちにとっ

て難しいところもあったが、学習発表会で町探検の
ことをやることになった時にその成果を改めて実感
した。各グループで伝えたいことを短くまとめる時
に、どのグループも物、事ばかりでなく、そこで働
く人たちについて多く入れていたことである。

副店長の名前はKさん。Kさんはいつも笑顔
でとてもにこにこ。だから「〇〇屋」におかし
を買いに行きたくなるよ。やさしいKさんが
いるから、すき。

ドラッグB店長のTさんはやさしくて、話し
やすいよ。Tさんが一番大切にしているのはお
客さん。うれしいことは、お客さんの喜ぶ顔
を見る時。お店にないものはとりよせてくれる。

これは、子どもたちの学習発表会での呼びかけの
一部であるが、どのセリフも子どもたちが考え、作
ったものである。「人」に視点を当てたことはなか
なか難しいところもあったが、このように子どもた
ちの心にしっかり残っていることがわかりとてもう
れしくなった。学習発表会での最後の呼びかけは、

いろいろなことを発見した町たんけん。やさし
い人がいっぱいいたよ。ステキなところがいっ
ぱいあったよ。大すきたちばな。

でしめくくった。

学年を持ちあがったため、3年生の社会「まち発
見！たちばな」の学習でもう一度子どもたちと一緒
に橘の町を歩くことになった。その時、2年生の時
お世話になったお店の前を通ると「Yさ〜ん。」と
手を振っていた子や「Kさんいるかな〜。」とお店
をのぞいていた子どもたちがいた。確実に2年生で
の町探検で地域の人とふれあったことが今も生きて
いて、それからずっとかかわりをもてていることに
本単元の大切さを実感することができた。

子どもの＜自立への基礎＞を養う生活科

—好むと好まざるとにかかわらず生活科とかかわってきた「はちきん」に見えてきたもの—

高知大学教育学部 非常勤講師

澤村 理恵

Ⅰ 生活科の原点にかえて

生活科の誕生と成長の過程はいわゆる「難産」であった。低学年に従来の社会科と理科の時間がなくなることにしても、反対の声が根強かった。当時の初代生活科教科調査官であった中野重人氏の言葉を借りれば、「北風ぴゅうぴゅうの時代」であり、現場は戸惑いに揺れた。

生活科の1度目の改訂(平成11年12月)に至るまでの10年間、生活科は元気な教科であった。全国どこも同じ生活科になっていないか、パターン化している生活科ではないか等、論議はされつつも、確実に定着の方向に進んでいった。

しかしながら、20年を経た現在、生活科の存在そのものによって、科学的認識力が低下したといわんばかりの批判をあげ、「ゆとりの生活科」はもはや終わったとマスコミには叩かれている。まさに認識不足であると筆者は考える。しかし、学習活動が体験のみで終わったり、活動や体験を通して得られた気づきの質を高める指導の弱さがあつたり、小1プロブレムの問題など、幼児教育と小学校教育との具体的な連携等々、生活科の課題は確かにある。熱心に生活科を研究し、追及しがんばっておいでる先生方が全国に居られることを筆者は元より承知であるが、あえて、苦言を呈したい。

このままでは、生活科が危ない。生活科は単なる活動主義ではなく、「総合的な学習の時間」の下請けでもなく、ただ教科書通りに遊ばせているだけの時間ではない。子どもの姿は、教師の姿であり、教育の姿であることを再認識しなければならない。生活科の時間の子どもの姿は、日々の教師の教育を映す鏡であることを肝に銘じるべきである。

筆者は、小学校教員として、生活科新設の頃から、好むと好まざるとにかかわらず、生活科教育に関わ

ってきた。また、幸いにも58歳で大学院に進学し、念願の生活科を研究するという時間と場を得ることができた。今こそ生活科の原点にかえり、生活科の教科目標であり、究極のねらいである「自立への基礎」とは一体何かを客観的、論理的に考え、見極めることが必要であると考えた。

Ⅱ アンケート調査から

生活科を研究していくうちに、筆者は下記のような漠然とした不安を感じるようになった。果たして、本当に生活科の究極の目標＜自立への基礎＞は育っているのだろうか。単に、教師の自己満足であつたり、育ちや気づきがすぐに結果として出るとは限らないと高をくくって、単なる評価の先送りをしているだけではないのか、という疑問が芽生えてきた。

そこで、第2学年までしかない生活科であるので、その2年間の終わりに自己評価を調査してみれば、解決の糸口が見えるのではないかと考え、アンケート調査の実施をすることにした。時期は、3年生になったばかりの4月中、生活科が終了し、そして「総合的な学習の時間」が始まろうとする頃、生活科の記憶の新しいうちに、調査することとした(徳島県と高知県の3つの小学校で実施し、306名の3年生児童の回答を得た)。

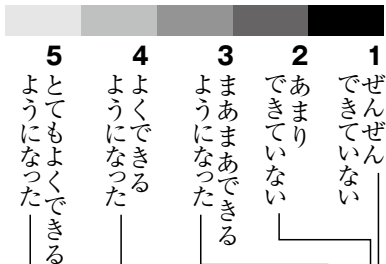
1 アンケートの目的

＜自立への基礎＞が養われているかどうかを把握するため、「アンケート」を実施。

アンケートの項目立てについては、小学校学習指導要領解説生活編の「内容構成の具体的な視点」11項目に基づき、「学習上の自立、生活上の自立、精神面の自立」の合計30項目とした。

教育の在り方

回答の5段階



2 アンケートの集計結果と考察

(1) アンケート記入の方法：

- アンケートの記入は、設問ごとに直接回答を記入する方法をとった。
- 回答は5項目の中であてはまる場所に1つ○をつけるようにした。
- 回答は、できるだけ詳細な気持ちを汲み取るため右記の5段階とした。

(2) アンケート集計結果（3校平均）と考察：

	番号	質問項目	(%)	0	25	50	75	100	
生活上の自立	1	「おはよう」や「こんにちは」などのあいさつができていますか。	56%				26	13	3
	2	交通ルールが守れていますか。	67%				20	11	1
	3	近所の人々とお話ができていますか。	57%				17	16	6
	4	身近な道具(包丁や金づちなど)を使うことができますか。	61%				18	12	5
	5	電車やバスなどを正しく使うことができますか。	58%				12	13	5
	6	うがい、手洗いなどをして、風邪をひかないようにしていますか。	55%				21	15	5
	7	家族のためになるお手伝いをしていますか。	53%				23	17	5
	8	寝る時間や起きる時間を自分で決めていますか。	50%				15	16	10
	9	自分で使うものを、準備したり、片付けたりしていますか。	53%				26	11	7
	10	お正月やお祭りなど地域の行事に参加できるようになりましたか。	54%				18	11	9
学習上の自立	11	図書館で本を借りることができますか。	59%				16	10	5
	12	手紙を書いて送ることができますか。	49%				17	17	8
	13	電話の使い方がわかり、正しく伝えることができますか。	71%					15	8
	14	動物や植物が育てることができますか。	58%				20	11	6
	15	自分の考えを大切に、書いたり、発表したりしていますか。	37%			23	25	11	4
	16	学習したことを自分の生活の中で使うことができますか。	45%				26	22	5
	17	自分で学習することのおもしろさに気付くようになりましたか。	52%				25	14	5
	18	みんなで協力して、学習することができるようになりましたか。	53%				22	19	4
	19	身近なもの(草花、竹、ペットボトル、紙など)で自分が工夫して作ったり、遊んだりしていますか。	58%				15	13	6
	20	季節の移り変わりや、天候の変化に気付くようになりましたか。	59%				21	10	6
精神的な自立	21	自分のよいところに気付くようになりましたか。	49%				25	15	7
	22	友達のよいところに気付くようになりましたか。	61%					21	11
	23	したいことに挑戦するようになりましたか。	65%					14	14
	24	少しくらいの失敗にもくじけたりせず、がんばりぬくことができるようになりましたか。	52%				23	14	7
	25	自信をもって生活できるようになりましたか。	52%				22	18	5
	26	夢や希望をもって生活できるようになりましたか。	58%				21	10	6
	27	生き物の命を大切にしようと思うようになりましたか。	67%					17	9
	28	身のまわりの自然(山、川、海、野原など)を大切にしようと思うようになりましたか。	65%					19	10
	29	遊びのルールを守って遊ぶことが、大切だと思うようになりましたか。	69%					21	7
	30	これまでにお世話になった人々に、感謝の気持ちがもてるようになりましたか。	63%					18	14

考察1（生活上の自立）

- ① あいさつや交通ルール、近所の人々との会話は概ねよくできている。
- ② 生活に必要な道具類（包丁や金づちなど）も概ね使えている。
- ③ 電車やバスの使用については、学校や家庭の近くに必要交通手段として存在するか否かによって異なると考えられる。
- ④ うがい、手洗いについては、平成21年5月以降から新型インフルエンザの流行があり、1か月違えばこの回答値はもっと高くなったと予想される。
- ⑤ 手伝いや自分のことについては、概ねよくできている。
- ⑥ 寝る時間や起きる時間ができてない(10%)は、家庭のしつけの違いや保護者の仕事の都合、保護者への甘えなどが考えられる。
- ⑦ 地域行事への参加は、地域行事の有無や、家庭の考え方により差異があると思われる。

考察2（学習上の自立）

- ① 図書館は学校図書館や公共の図書館が考えられるが、(9%)の子どもが本を借りることができていないと回答している実態は課題である。図書館の施設設備の充実とともに、図書館教育の指導が望まれる。
- ② 手紙を書いて送ることができない子ども(10%)があることは、国語教育、書写の指導上からも、課題である。
- ③ 電話の使用については、さすがに今の子どもたちであり、よくできている。
- ④ 動物や植物を育てることについては、学校以外では家庭環境の影響が大きいと考える。
- ⑤ 「15、自分の考えを大切に、書いたり、発表したりしていますか。」「16、学習したことを自分の生活の中で使うことができていますか。」が予想以上に低いことについては、今の学校教

育の指導の在り方が問われている。

- ⑥ 学ぶことのおもしろさについては、気付いている子どもが多く良い傾向である。
- ⑦ 身近なものを使って工夫したり、遊んだりすることができていない子どもが14%もいることは意外である。遊ぶ時間がないのか、家での遊び方が、TVゲームやゲームソフトに偏っているのではないかと。少なくとも学校で、工夫して遊ぶことを教えなければならない時代と環境になってきていることが伺える。
- ⑧ 季節や天候など環境の変化に気付いており、これからの理科、環境教育上からも望ましい。

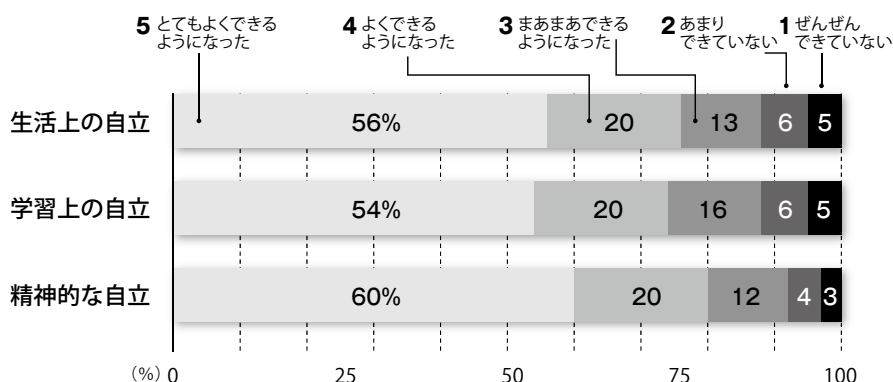
考察3（精神的自立）

- ① 自分のよさや、友達のよさに気付くようになったと自己認識する子どもがいることは、よい傾向である。
- ② 意欲的に挑戦したり、チャレンジ心が増したりしていると自己認識できることは、よりよいことである。
- ③ 失敗に負けず、がんばりぬくことを大切に考えていることがわかって安堵する。
- ④ 低学年児童なりに、夢や希望をもっていることがわかった。
- ⑤ 命の学習の成果もでているのかもしれない。
- ⑥ 環境学習に発展していける自然についての素地作りができてきている。
- ⑦ 活動や体験を通す中で、ルールや、感謝の気持ち等をもつことの大切さがわかってきている。

考察4（全集計結果より）

- ① 実施した3校は、地域・学校環境が異なるため、多少の違いは見られたが、ほぼ同じような傾向性があることがわかった。このことからこのアンケートはかなりの普遍性をもつと言える。
- ② 「生活上の自立」が76%、「学習上の自立」が74%、「精神的自立」が80%であり、「学習上

子どもの＜自立への基礎＞を養う生活科教育の在り方



ためには、教師の適切な働きかけが必要である。子どもが自分に自信をもつことができるなどの、「精神的な自立」をさらに伸ばしていくために教師がしなければならない、適切な「支援」は下記のようなことが考えられる。

の自立」が他の項目より、やや低位であることが明らかになった。

- ③ 学習上の自立においては、特に、自分の考えを大切に、書いたり、発表したりする力がやや劣ることがわかった。即ちこれは、「活用力」であり、現在の日本の児童・生徒に不足しており、求められている学力でもある。
- ④ 生活科の究極の課題である「自立への基礎」が「生活上の自立」・「学習上の自立」・「精神的な自立」において学校間格差は概ねなく、子どもの中に育っていると言える。[「とてもよくできるようになった」、「よくできるようになった」を合わせた全項目平均は77%]であり、分析結果として、生活科における「自立への基礎」は概ね養われているといえる。

・称賛 ・励まし ・うなずく ・承認
・見守る ・聞き届ける ・言葉かけ ・助言
・手助け ・まなざし 等

(3)「生活上の自立」については、学校における指導は当然であるが、何よりも家庭における生活面の自立が大切である。保護者の理解、協力、教師との信頼関係の構築など、まずは家庭との連携が不可欠である。

❷ 教師の役割

教師の役割が大切であることは、自明の理である。教師は常に自分磨きにチャレンジする心を忘れてはならない。子どもが自信をもつこと。いかに自信を持てるように、持たせられるように支援していくか、それこそが教師の力である。そして、子どもの意欲をすかさずかって褒めること、認めることである。褒め言葉「あなたは天才である」でもよいではないか。子どもの心をくすぐるような、ときには歯の浮くような適切な褒め言葉をかけてやったらどうだろう。最後に、基礎・基本の学習こそ知識・技能である。日頃の学習指導もしっかりすることが肝要である。紙面の都合上、アンケート集計結果における因子分析については割愛する。

(裏表紙へつづく)

㊦ アンケートから見られる今後の課題

(1) 今後の課題：

「学習上の自立」のためには、活動や体験をする必要がある。特に思考する、考えたことを書く、伝えるなどの機会を多くする必要がある。また、活動や体験をしなければ生活科で求める力は根付かない。活動や体験を通して、その感動や興味関心、気付き等を言葉や文、絵や動作、劇化などで表現することこそが、生活科の生活科たるゆえんである。

(2) 学習したことを、生活の中で生かすようにする



子どもの＜自立への基礎＞を養う生活科教育の在り方

5 生活科教育からの発展

今日の日本の教育が問われている課題は、子どもたちの「自信」や「意欲」が育つ教育、即ち「自立」する教育を推進することにある。もちろん「自立」は学校教育の、「生活科」、「総合的な学習の時間」の学習だけで育つものではない。全教育活動と、家庭、子どもを取りまく地域環境社会等々において育てられていくものである。ここに低学年生活科の意義がある。生活科の究極のねらいは、自立への基礎なのである。生活科教育の発展は「自信」や「意欲」の発展であるといっても過言ではない。成長する子どもたちが「自信」や「意欲」の芽を豊かにふくらませていくことのできる教育の理念や教育制度の在り方が今こそ問われているのである。

生活科は、具体的な活動や体験を通して＜自立への基礎＞を養い、未来の生き方を拓く教科である。子どもに夢と希望を語り、明日もたくましく生きる力を育む教科である。それを指導する教師自身も、**自信・知識と技能・意欲**をもって、明日にはばたく子どもたちを育ててほしい。

6 おわりに

生活科スタート期から生活科教育にかかわってきた者として、やっと自分の追求する課題が見えてきた。遅いと言われようが、姥桜と笑われようが著者「ハチキン」の生涯学習における一里塚なのである。今が旬、心は満開である。

翔べ、生活科の子どもたち、
翔べ、翔べ、生活科の教師たち。

* 本稿はダイジェスト版であり、アンケート結果の因子分析を含む全文は、教育出版ホームページ <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/> の生活科サイトに掲載しています（編集部）。

生活科・総合通信 そよかぜ通信 【2010年 秋号】2010年10月1日 発行

編集：教育出版株式会社編集部
印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光
発行所：教育出版株式会社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864(お問い合わせ)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社	〒060-0003	札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所	〒040-0011	函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング3F TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社	〒980-0014	仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社	〒460-0011	名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社	〒541-0056	大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社	〒730-0051	広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社	〒790-0004	松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル5F TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社	〒810-0001	福岡市中央区天神2-8-49 ヒューリック福岡ビル8F TEL: 092-781-2861 FAX: 092-781-2863
沖縄営業所	〒901-0155	那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411